非文字資料研究についての一考察

網　野　　暁
AMINO Satoru

はじめに

2004年2月6日現在，インターネットの代表的な検索サイトであるGoogleで「非文字資料」という単語を検索すると，結果件数は「非文字資料」が219件，「文字資料」が12700件（非文字資料219件を含む）であった[(1)]．ちなみに「非文字資料」で最初に出てくる検索結果は，2003年10月にスタートしたばかりである神奈川大学本COEプログラムのホームページであった．「文字資料」と検索した場合「出土文字」資料，「アラビア文字」資料などの言葉も全てその結果に含まれてしまうことや，検索方法が学問上の問題や方法論と全く関係ないことからしても，この結果が学術的な客観性を持たず，なんらかの判断を下す材料にはなりえないことは明らかである．とはいえしかし，この数字の大差は「非文字資料」に対する研究が全く未開の領域であり，まさしくこれからの学問であることの一端を示しているといえるのではなかろうか．本COEプログラム拠点リーダー福田アジオ氏が述べるとおり，「人々は文字に縛られ，特に文化の研究は文字に記されたもののみに価値を置く傾向が強い．しかし，文字に記録されることのない人間の行為や知識あるいは観念のほうがはるかに膨大であり，多様であ」り［福田2003 p.4］，文字資料と非文字資料が人類文化研究という車の両輪をなして進んでいくためにも，今まさに非文字の資料化・体系化が必要とされているのだと思われる．このプログラムが非文字資料研究の拠点となり，体系化した成果を世に発信していくためには，非文字の資料化，そしてそのデータベースのありかたを常に念頭におかなければならない．

本プログラムが資料として対象にしている図像・モノ・しぐさ・身体技法・環境・景観等は，それぞれ個別にさまざまな分野でその研究のための「資料」として用いられてきた．それを「文字」に非ざるものとして包括したうえで資料ととらえ，体系化することに本プログラムの大いなる意義があると考えられる．非「モノ資料」，非「記号資料」，非「記された資料」といったように，「それ以外」のそれにあたる資料は種々想定できるのにもかかわらず，あえて文字に非ざる資料としたことに本プログラムの意味と可能性がある．そして，なぜ文字・非文字でなければならないのかは，後述するように，対象資料のデジタル化が容易であるか否かにも起因していると考えられる．文字は二進法の数字に置き換え検索が容易であるが，絵画をデジタル化しても，そのデジタル情報を検索してその作品に行きつくかといえばそうではない．さらに，モノ，しぐさ，景観となれば，そのデジタル化すら困難であることは言うまでもなかろう．この分野の発展を妨げてきた一つの理由にこのデジタル化――資料化とは別の意味で――の困難さがあるといっても過言ではなかろう．だからこそ，学問的・技術的環境が整いつつある今，この分野の発展が急務として求められているのだと思う．

本小論では，非文字資料に関して，これまで自らのほんの僅ではあるが研究の中で考察してきたことに加え，2003年10月28日の国立民族学博物館，12月4日の東京都写真美術館，12月9日～13日までの韓国への調査を通じて，見聞きしてきたもの，新たに考えさせられたこと，あるいはまだ短期間ではあるが本プログラムに身をおくことができたことによって得たものを，些少ではあるが考察してみたい．

I “猿”を通してみた非文字資料

筆者は1984年佐渡において，宮本常一氏の意志を

引継いで開催された「第一回芸能大学」に参加することができ，そこで猿舞座の村崎修二氏に出会ったことにより，芸能，猿回し，民俗学，宮本常一に初めて触れた［北川 1986］．このことはその後の二十年間，私に多大なる影響を与え続け，猿そのもの，猿回しそのものを資料として直接的に研究の対象としたことは無かったが，神社の組織や信仰の形態，あるいは神社と動物の関係，神社における地主神の問題を考察するために，猿を様々な場面で補助的な資料として活用してきた．というのも，猿あるいは猿回しといった非文字の対象を，どうしたら客観的な資料とすることができるのか，そしてそれを体系化して研究につなげていけばよいのか全く見当がつかなかったため，間接的な扱い方をしてきた．ここでごく僅かではあるが非文字資料としての「猿」を通して見ることがでた事例をいくつか紹介してみたい．

単なる動物としての猿，一頭の猿の存在やその姿，あるいは，花鳥風月画に描かれた猿それ自体がいわゆる文系の人文科学，特に民俗学や歴史学の「資料」になることは難しい．野に佇む猿の写真を撮ってきただけでは，民俗も歴史も語れないと思う．ただし集団としての猿，社会的な行動を示すような霊長類研究が生態調査を行っている諸事例が人間そのものの研究につながっていることは言うまでもないことなのだが，それも直接民俗・歴史の研究に結びつくかと問われれば，やはり難しいといわざるをえない．しかしながら，猿廻しという芸能として表現された場合，大貫恵美子氏の言う文化を反映する鏡として機能を果たす猿という意味でも，猿の「資料」性が浮かび上がって来る［大貫 1995］．一例をあげるならば，猿廻しの伝統的な芸のなかに，猿が人形の赤ん坊を負ぶって，あたかも反閇のように交互に足を膝から後ろに曲げて，あやすような仕草をするものがある．子供を育てた経験のある方々が喜ばれる芸である．しかし，この芸を子供を背負う習慣のない文化に属する人々，例えば西欧人などは，果たしてどのように見るのであろうか．そして負ぶうことがすたれ，抱くことが主流となっている現状から考えると，この芸が今後も感動を与え続けていけるのだろうかと不安にすら思う．同じく伝統的なもので，猿廻しが二本の輪を両手で茶筒の上の面と下の面のように縦に大きくかかげ，その二つの輪を猿が下から上へとくぐり抜けるという芸，同様に左右の手を広げて，両手に持った二本の輪を平行にくぐり抜ける芸があるのだが，これらは言葉にしてしまうと単にそれだけの演技，猿の運動能力・訓練の結果の披露でしかないのだが，これらの芸にそれぞれ「鯉の滝登り」「鶯の谷渡り」とタイトルがつけられただけで，全く違うものとして観客の目に映るのである．ただし，それは，鯉が滝を登っている姿を図像なりの資料で見たことがあり，それをすぐさまイメージとして思い起こすことのできる文化圏に属する人に限られ，それ以外の人にとっては単なる動物のアクロバティックな芸にしか映らないと思われる．また猿廻しは広くアジアに分布しており，ビデオでインドの猿廻しを見たことがあるが，あくまで個人的な主観に過ぎないが，その猿の芸は，猿の可愛らしさは共通しているが，国も違えば芸態にも差がでるのだと感じるだけであり，日本のそれから受ける感覚とは大きく違っていた．何気なく見る猿廻しの芸態の中に，私たちが見て全く違和感のないもの，深く我々の文化に根づいたものが，表象されているといえよう．まず，ここまでは猿を資料としてとらえることはできるのであるが，さらに客観的な資料へ，そして体系化へと進めようと思うと，難しいのもまた事実である．

次に神社あるいは神と猿をはじめとする動物との関係についても，非文字資料，とくに図像資料の観点からみた事例をあげてみたい．猿が神使であることでも有名な近江国の日吉社（現日吉大社）は，山王二十一社とも呼ばれる複数の神社によって構成され，その二十一社も上・中・下各七社に区分されている．歴史的に見ても日吉社の中心を担ってきたのは上七社であったが，中七社に大行事と呼ばれる一社があり，筆者はかつてこの社が地主神として，また猿と深い関係を有することによって，上七社に勝るとも劣らない役割を果たしてきたことを明らかにした［網野 1997］．しかし，その過程で，この神が時代時代の人々にどのように認識されていたかを理解することは困難をきわめた．それを明確にしたのが，『日吉山王権現地新記』に描かれた神影であり[(2)]，また，時代の確定を可能にしたのが，チェスター・ビーティー本「十二類歌合巻

神道大系『日吉』「日吉山王権現地新記」より

き」という15世紀前半以前に成立が確認されている絵巻きであった．この中に「よろづの物の中に，猿こそすぐれたれやな，春は花の散らざる，（中略）山王の侍者とも我をぞ定め給へる，年ごとの卯月には我が日ぞ御幸なりける，大行事と申すは則ち我がかたちよ，神護寺の法花会，猿の孝養とかやな，……」と猿が自分のことを自慢している下りがある［大西1994］．この記述により，大行事が猿と同一視，大行事が猿に衣冠を着した姿であると認識されていたことが初めて明らかになった．中世以前の資料はほとんど見ることができなかったが，そのことが，この資料で明らかになっただけではなく，大行事を猿の姿で描いた神像が画像として15世紀以前に流布していたことを示しているのである．

大行事という日吉の猿と集合した神について述べたが，神社にまつわる動物は「神使」という語であらわされるのが一般的であるが，神そのものの姿であらわされるこの大行事という神を例にとってみても，神社にまつわる動物を単に神の使いという範疇でとらえることはできないのである．神社における動物の機能は単に神の意志を人間に伝えるための「お使い」だけではなく，大行事のように動物が神そのものである場合があったり，また「お使い」としての動物であっても，動物に憑依して仮の姿であったり，姿・大きさ・色が他とはちがう異形の動物の出現であったり，あるいは動物の普段と違う行為が神の意志を反映しているなど，あらわれ方は一様では無い．また動物の種類によっても，可能な機能・不可能な機能がある．たとえば，鹿と猿とでは，前者は神様の乗り物になれても，後者は乗り物として使用された事例は管見の限りではない．簡単に見てきたが，これだけでも，神社における動物の機能が多岐にわたっていることが理解できるであろう．これらの違いを正確に峻別するためには，文字資料だけでは無く，画像資料が不可欠である．たとえば春日神社では縁起・絵巻の中で，霊験をあらわすために，普通の鹿が群をなしてその場所，人物の場所を指示するモチーフをしばしば見ることができる[(3)]．これは，描いた者が口伝・文字等から情報を得てあらわしたのか，図像をより分かりやすくするために鹿を用いただけなのか，あるいは春日に伝わる典型的な表現方法であるために使用したのかなど，様々なことが考えられる．文字からだけでは分からない部分，この場合では，特別な鹿を描いているか，あるいは，普通の鹿が神的な何かによって動かされているのかなど，図像でなければ分からない内容がそこにはあり，ここに描かれた神観念，あるいは当時の人の宗教観をあらわしていると言える．

以上，「猿」そして動物という視点から非文字をいかに資料として考えるか，そして非文字資料としての猿をとらえた場合にそこから何が見えてくるのか，簡単ではあるが考察してみた．筆者は，現状において猿まわしにおける猿については，その資料化の方法と方向性を模索している段階であり，また，神社における猿に関して言えば，文字資料では把握しきれない領域を理解するための手段として，非文字資料を用いているに過ぎないが，いかにこれを客観的な資料としていくかが今後の課題である．

II　非文字の資料のデジタル化とデータベース

2003年10月28日の国立民族学博物館における視察・意見交換は，資料のデータ化という点において大いに示唆を受けた．国立民族学博物館で扱う資料の中心は非文字資料，特に二次元の資料だけでなく，膨大な数の三次元の資料を多く扱い，それをデータベース化している．そのデータベース化に際してモノを三次

国立民族学博物館における資料撮影の様子

元デジタル化すなわち形を数値化してその形状を記録する方法と，三方向からの写真撮影及び計測に寄って記録する方法をとっているが，現在は，後者に力を入れているという．三次元デジタル化によるモノの資料化は，今後の主流になることは間違いないであろうが，コストの問題や現在の技術の発展状況にまだ難があるのであろう．そのなかで，現在国立民族学博物館が三次元デジタル化ではなく，写真による資料化を中心にしているということは，今後の対象の資料化に対する考え方，そしてデータベースのあり方という点に関して多くの事を考えさせられる．今必要とされていることに対して何がもっとも有効であるかが非常に明確であると感じられたのである．

国立民族学博物館にて

近年インターネット及びパソコンの普及・高速化に伴い，数年前では考えることできない検索が可能になった．インターネット上では理論上，ネットワーク上にあるデジタル文字情報の大半を検索できる状態にあり，ある単語を検索すればそれを載せたホームページのほとんどを，検索結果として知ることが可能である．ネットワーク上でなくとも，単に個人のパソコンに，あらかじめ膨大なテキストを入力しておけば，あとでそれを検索し，簡単に関連項目を並べ比較検討することができる．このような技術の向上が，ややもすればデータベースのあり方を変容させつつあるのではなかろうか．すなわち検索すること自体が非常に簡単であるため，あとはいかに量的にデータを充実させるかに目が向き，そもそも何の研究をするためにデータベースを構築するのかという本来の目的を忘れてしまう傾向にあるのではないか．国立民族学博物館の資料化の作業において，単にデジタル化だけを追い求めるのではなく，立体標本の資料化及びデータベース化において，今現在何が求められ，そのために必要な方法は何か，それらをもとに何を構築し，どこに重点をおくべきなのか，それらの判断のもとに進められていることが非常に素晴らしいと感じられた．

筆者はこのプログラムに参加してからの一時期，全国の博物館のホームページ開設状況及びデータベースの公開がどの程度進んでいるか調べようと試みたことがある．その中で感じたことは，デジタル情報化された文字が簡単に検索できることという性質から，身近で使いやすいものになったと同時にデータベースのあり方を変容させてしまったのではないかと思われる．この作業をすすめるなかで，博物館のデータベースではないが山口県の東和町役場が作っている宮本常一データベースにたどりついたことがあった[(4)]．宮本常一の撮影した写真とその場所や日時，あるいは蔵書一覧など膨大なデータを見ることができる．学術機関ではない一行政機関による資料収集・公開という点においては群を抜いた出来栄えといっても，過言ではなかろう．宮本常一の撮った写真をこれほど手軽で身近に見ることができるというのは，研究者にとって誠にありがたい存在である．そのことには大いに評価を認めつつただ一点，データベースという観点からみると，確かに宮本の撮った写真とその年代，おおよその地域は分かるのではあるが，見方をかえると写真の羅列であり，それ以上でも以下でもないとも言えるのである．宮本常一がどのような写真を撮ったのか見たいという人間にとってはこれほど便利なものは無いが，ある観

点から宮本の写真をとらえたい，あるいは宮本のこのような写真にたどりつきたいという人が果たしてこのデータベースを使うであろうか，また使えるのであろうかと一瞬考えてしまうのである．しかし，これをデータベースではないと言えるわけではないのである．このあたりにデータベースのあり方に一つの線引きが可能ではないかと思う．デジタル化されていない，たとえば手書きの文字のあつまりは，例えその量が膨大であっても何の役にも立たない可能性が非常に高いが，それが，ただデジタル化されているというだけで検索という行為が可能になり，文字の集積になんらかの価値が発生したと感じられる．ここで感じた価値がデータベースにつながると錯覚してしまうことがデジタル化の落とし穴だと思われる．

さて，文字資料はデジタル化すれば，変換されたそのものが検索の対象となりえるが，非文字資料，たとえば図像をデジタル化したとしても，元の図像が検索対象になるわけではない．非文字資料に必要なのは，それがあらわす内容に対する意味づけなのである．図像資料ならばデジタル化は視覚的に複写となりえるが，立体のモノのデジタル化は視覚的な複写となりえるホログラムのような技術は確立しておらず，現在のところ数値化でしかなく，そのために二次元の図像・写真にしたうえでの，意味づけを行うのが現在における適切な資料化であると言える．しかし，文字情報の場合には，データベース化した場合の元の単語も，抽象化されたキーワードも同じく文字情報として残る．非文字資料の場合，例えば絵画からキーワードを導き出したとしても，デジタル情報化されるのはキーワードだけであり，その時点で元資料と切り離されてしまう可能性が高い．これこそ，非文字の資料化の，そのデータベース化の難しさである．文字・非文字に関らず，キーワードとして概念化する過程は，各研究者に依存する部分が多くなるのである．そして，このことを承知の上で，あえて図像に対する意味づけをし，資料として体系化を目指したのが，日本常民文化研究所が作成した「絵巻物による日本常民生活絵引」全５巻であり，そして本 COE プログラムが手がけている，「日本近世・近代生活絵引」の編纂・「東アジア生活絵引」編纂であり，一つの有効な方法なのである．すなわち，図像・絵画の中から，情報を取り出し，それに名前をつけ検索を可能にし，そのうえで図像全体を読み取ろうとする試みである．となると国立民族学博物館の試みは三次元のものを二次元に変換し，そこから情報を読み取る作業であり，同様の手続きは文字資料のデータベース化の際に決して忘れてはならないのである．

III　データベースのあり方

このプログラムにおける研究・調査を通し，今後の課題の一つが著作権や肖像権であることをも痛感した．個人が個人のためにデータベースを作成する際には全く問題は無いが，組織が作る場合，今後それを公開にするか非公開――ことにインターネット上において――にするかの選択を迫られること間違いは無いと思われる．これまでの調査を通じても，また，先に述べたような博物館のホームページにおけるデータベースの取り組み方から見ても，基本的には自らの持つ資料の公開に拒否反応を示している所は少なく感じられた．そのような状況の中で一般に公開しない理由としては，自分たちが作り上げたものは自らの利益のために存在のであり，他者のために労力を費やしたのではないといった従来型の考え方ではなく，最近では，公開することによる資料提供者への被害を心配することにより，すなわち著作権・肖像権の問題で公開を避ける場合が多いように思われる．ネットワーク上で，一旦デジタル化され公開されてしまったものは，コピーを食い止めることが不可能に近いといったことが，その根本的な理由であろう．その情報に対する需要が高

東京都写真美術館にて

ければ，いかにコピーに対する防御策を講じたとしても突破されるであろうが，例えばその情報を欲する人が良識ある研究者に限られ，転売・闇売りなどの危険性がなければ，ネットワークに流しても大きな問題が無い場合が多い．

写真は，資料という観点からすれば，ネガさえあれば他の資料よりもコピーが正確で容易あると私は錯覚していたが，その考えを12月4日の東京都写真美術館への調査で大きな間違いであることを諭された．東京都写真美術館は，厳格に，その写真を取った人間・あるいはその人を代理できる人間が，「作品」と認めたシートだけを収蔵品し，資料としている．所蔵資料の使用の要望に対しては，博物館として判断するのでは無く，あくまで制作者あるいはそれと同等であり得る人の許可がなければならないと徹底していたのである．東京都写真美術館では，内部において写真を検索できるデータベースシステムを構築していたが，それはあくまで所蔵品にたどりつくための手段としての位置づけであり，おそらくインターネットなどで一般に公開されることはないのではないかと思われた．国立民族学博物館においても，所有する資料の情報を公開していく方向性にあるのだが，立ちはだかるのが著作権・肖像権とのことであった．

誰もが共有できる資料をデータベース化し，公開することを目的とした，本プログラムがすすめつつある，刊行された書籍に転載されている図像をデータベース化し，公開していこうとする試みも，様々な制約の中で広く情報を共有していくためにも必要なことなのかもしれない．そして，そのデータベースの有用性が広く認知されれば，新たなデータベースの在り方と，今後の資料・データ公開の一つの試金石になり得るのではないかと思う．

最後にデータベースの縦・横のつながりについて，すなわち並列して存在する複数のデータベースがどのように連携をはかっていくのか，若干考察してみたい．2003年12月9日～13日の韓国調査で，入手を予定していた日本で言う所の所謂「農書」は，韓国において，研究者からの情報でその存在は確認できるのだが，いざそれを購入あるいは入手することは非常に困難であった．その一つの理由は都市開発によりソウル市内の有名古書店街がなくなってしまったことにあるが，もう一つには，店舗を構えずに商いを行っている業者の存在であった．当然のことではあるが，中国・韓国・日本において「農書」という観点から図像資料を考察していこうと試みても，各国で書籍あるいは資料に対する感覚が全く異なり，残存形態も流通形態もまったく異なるのである．そのような状況の中で作り出された三つのデータベースが同じものになりえないことは明らかであり，共通する部分，明らかに異なる部分を認識していなければならない．図像から情報を読み取るという共通したデータベースの縦の軸に対し，それに基づいて作り出されたものがどこまでを共有して横の軸にし，どこからを国ごとの差異として位置づけて行くのか．日本の側からの発信である試みであるため，比較を考慮にいれると絵引きあるいは農書などから作業をはじめることが重要であるが，その一方で日本の民俗画と韓国で言われる民画とは，その内容に差異が認められるが，そこにある最低限の横の軸を見いだしていくことも，今後の課題であると考えられる．

絵をはじめとする図像に対し，研究者がそれぞれの視点で名称を付し，デジタル情報的にも処理可能にしていく，この基本姿勢は，日本常民絵引きから，はじまる，図像の資料化に際しては一つの有用な手法であり得ることのできる成果は多い．同様のことを東アジア全体で行ったとき，――図像の解析を日本人が主に行うのかそれとも，それぞれの国の研究者に主に行うかでも結果は全く異るであろうが――いずれかが勝るのではなく，何を求めるためのデータベースなのかに立ち返ったとき，自ずと選択肢は見えてくるのだと思われ，また，データの抽出の幅を広げておけば，目的に応じた複数のデータベースが制作可能である．何を目的とするのかを明確にしていないと，検索システムといった観点からだけではなく，東アジア各国でデータベース化された時に，密な横のつながりが存在しなければ本当の意味での有効なものとはならないと思われる．

おわりに

以上，本当に簡単ではあるが，非文字をいかにして

資料化していくか，そしてそれをいかに有意義なデータベースとして作り上げていけばいいか，まったく未熟な段階ではあるが論じてみた．結論らしい結論を出すことはできなかったが，いくつかの問題点と課題は提示できたのではないかと思う．難しいのには難しいなりの，未開拓であることにはそれなりの理由があることも，この問題を考えてみて改めて痛感させられた．しかし，このプログラムが完成した暁の大きな成果の予見もできたのではないかと思う．

なお，調査に協力して下さった国立民族学博物館の宇治谷恵氏，山本泰則氏，写真美術館の金子隆一氏，韓国調査における，延世大学校中央博物館 博物館長・白永瑞氏，仁荷大学校・崔仁鶴氏，檀国大学校・姜在哲氏，延世大学校・朴忠來氏，国立民俗博物館専門委員・張長植氏，漢陽大学校・金容徳氏，全州大学・河秀京氏，ソウル大学校奎章閣図書館 資料管理室・裵弘植氏，同図書館司書・権在哲氏をはじめとする多くの方々にお世話して頂いたことをこの場をお借りして厚く御礼申し上げたい．

注

(1) Google を選択した理由は，カテゴリー検索ではなく機械式にデータ収集しており，主観が含まれていないからである．したがって他の検索サイトでも全く問題はなく，事実エキサイト，goo 等，筆者が知るかぎりの検索サイトにおいて，二つの言葉の検索結果には 10 倍以上の差を確認できた．なお，検索方法は，フレーズ検索によった．

(2) 「日吉山王権現地新記」『神道大系 日吉』p. 484 なお『日吉山王権現地新記』は，解題によると中世の史料をもとに近世初頭成立しているとみられている．

(3) 続日本絵巻大成 15『春日権現験記絵』79 等を参照のこと．

(4) http://www.towatown.jp/database/index.html
現時点ではこのようにデータベースのアドレスを示すことができるがこれが刊行された論文等とは違い，事情が変われば現在手軽に見る事のできるものが明日にはそれが全く不可能になる可能性があるなど，半恒久的に参照できないことも，インターネットでデータベースを公開することの問題点の一つである．

参考文献

網野暁　1997「日吉社組織における大行事の位置」『中世史研究』22 号 1998「日本の固有信仰における神と動物」『歴史民俗資料学研究』3 号

大西廣他編　1994『鳥獣戯語』福音館書店

大貫恵美子　1995『日本文化と猿』平凡社

香月洋一郎 佐藤佳子編　1991『猿曳き参上 村崎修二と安登夢の旅』平凡社

北川鉄夫　1986『佐渡の芸能』文理閣

福田アジオ　2003「「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の構想」『非文字資料研究』No. 1

村崎修二編　1986『花猿誕生――道ゆく芸能をもとめて』清風堂書店

渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編　1984『新版 絵巻物による 日本常民生活絵引』平凡社

（COE 研究員・PD）

〔2004 年 2 月 20 日受理，3 月 10 日審査終了〕